

Iokantarika-niraya

成立過程の推論

伴 戸 昇 空

分別上座部等では、地獄を Iokantarika-niraya と名付け、その所在を Iokantara に想定し¹⁾、Iokantara とは、三つの鉄囲山が一平面上で水平に接し合つてできる、三角形に似た間隙のことである。地獄の所在に関しては仏教界全体の統一見解は無い。唯、古来地獄は「日月の光も及ばぬ冥暗処」であるという点では何れの方面からも全く異論が無かつた様である。それ故にか、諸部派の阿毘達磨論師達は、自派の採用する世界形態の中で、須弥山の中腹を巡る日月の光の及びそうもない処こそが地獄の在るべき位置と考えたらしい形跡がある。

仏教徒達が一世界の形態に対して懐いていたイメージは、大きく三つの典型に類別できる。【第一類】長阿含世記経・大樓炭経・起世経等の如く、所謂風輪・水輪・金輪ともにその広さは無量(asa-mukhya)であると²⁾するもの。【第二類】婆沙論・俱舍論・順正理論の如く、風輪の広さのみ無量であつて、水輪・金輪の広さはともに 1, 203, 450 由旬であると³⁾するもの。【第三類】Athasālinī・Visud-dhimagga・立世阿毘曇論(Iokapāṇāṭi)の如く、三輪ともに広さは 1, 203, 450 由旬であると⁴⁾するもの。以上三種である。第一類では、須弥山から最も遠く離れた無限の彼方、金輪の最外端に特に遮

光の為の工夫と思われる二重の鉄囲山が準備され、その谷間に地獄が置かれている。この場合は金輪の広さが無量であるという点にキーポイントがあつた。日月の光の及びぬ処は日月から最も遠く離れた所に求められるべきであつたし、この無量という規模が金輪上でそれを可能にしている様に思われたのであろう。第二類の世界では手狭な金輪の表面に適当な場所が見付からなかつた。そこで、地獄は、日月の光の及びない最も手近な場所、即ち瞻部洲下の地中に求められた。少し想像を逞しくして、瞻部洲表面と地獄の間に白色・赤色・黄色・青色の四種の土層が設けられたのも、遮光の為の一工夫と考えるのは行き過ぎであらうか。第三類の世界でも同様に金輪の表面に適当な場所を見出だせなかつたが、地下に地獄を求めるという方向は採らなかつた。第三類の世界では三輪の広さを統一したことによつて、多数世界を構成すると三つの世界が接し合うことになつた。そこに、恐らくは予期しなかつたであらう様な「日月の光も及ばぬ処ができてしまつたのである。それが Iokantara だつたのである。

パリー語の Iokantara に相当する梵語は Iokāntara である。この Iokāntara は “antara” をその第二義に「他」と解し、⁵⁾ “another world, the next life, the future life” と訳される如く、人の死後に時間的に隣接している「来世」を意味する語として、仏教宇宙論の確立以前から用いられていた様である。それが思想的展開に伴つて、バラモン教世界から仏教世界等へと流れて来たと考えられる。説一切有部では、この語を「他の世界体系」という意味で自派内に採り入れている。これは本来時間的に解されていた “antara” を、空間的に解することによつて生じた用法であらう。ところが、

先述の第三類の世界形態を採用した分別上座部等は、三つの世界の接し合った姿を表象するに至ると程無く、その三世界の中間にできる間隙を、さ程躊躇うことなく「lokantara」（世界の中間）と呼んだであろう。何故ならば「antara」の第一義は「中間」だからである。より早い時期の梵語の lokantara に「世界の中間」なる意味が無かつたのは、それまでの梵語文化圏に「世界の中間」に対応する様な具体的な現象乃至はイメージが存在していなかつたからなのである。lokantara は、第三類の世界形態の成立に伴つて、初めてその第一義的に表わすべき意味内容と対応する具体的なイメージを見出だしたと言えよう。しかし、その「世界の中間」なる新しい概念を表わしているはずの lokantara にも、同世界でそれまで通りの意味で用いられ続けていた lokantara のイメージが多分にオーヴァラップして来ることは避けられなかつたであろう。即ち、分別上座部等の lokantara は、ブラモン世界に源を発する lokantara の強烈な残像を引きずりながら、「世界の中間」なる新しい概念を表わしていたと思われる。lokantara なる語で「世界の中間」を表象する度に、「the next world, the future life」という様に、燃え残りの炎がチラチラしてゐたというわけである。

折しもこの様な時に、彼の部派の阿毘達磨論師達は、「日月の光も及ばぬ」という立地条件に適つた地獄にふさわしい場所を求めていたのである。先述の如く lokantara は正にその条件に適つてゐた。その上、「the next world, the future life」と、抗し難く誘ふの声がかかつてゐた。一切有情を五趣に分けて考へるならば、人間や傍生の住むこの世界にとつて、空間的な「the next world」は、理論的に餓鬼と地獄の世界であろう。又、餓鬼、即ち「preta」は、

死者を意味する梵語の「preta」に由来するのであるから、これは人の死後に時間的に隣接する「the future life」とも本来強く結び付いた存在なのである。第三類の世界形態を採用したことによつて導き出された、以上の如き必然的とも言える諸事情により、彼らは、餓鬼と地獄の世界を一括して lokantara に想定すれば極めて好都合であるという結論に到達したのである。かくして、分別上座部等では lokantara に餓鬼趣と地獄趣が棲み付くことになり、その領域を特に lokantarika-niraya と名付けるに至つたと推量されるのである。

- 1 DN, II, p. 12; MN, III, p. 120; AN, II, p. 130; SN, V, p. 454, etc.
- 2 SA, II, p. 290; DA, II, p. 433, etc.
- 3 仏説長阿含經 卷第一(大・三三)等。
- 4 長阿含世記經(大・二四〇)・大樓炭經(大・二七七 a—b)・起世經(大・三二〇 c)。
- 5 婆沙論(大・二七・六九一 b)・俱舍論(大・二九・五七 a)・正理論(大・二九・五一五^a)。
- 6 Athasālini, pp. 297ff., PTS; Visuddhimagga, pp. 205ff. 立世阿毘達磨論(大・三三・一三三^a)。Eugene Denis: La loka-paññatti, 1977, Paris, I, p. 2 參照。
- 7 長阿含世記經(大・一一一 c)・大樓炭經(大・二八三 b—c)・起世經(大・三二〇 b—c)。
- 8 婆沙論(大・二七・八六六 b—c)・俱舍論(大・二九・五八 a—b)・順正理論(大・二九・五一六 a)。
- 9 婆沙論卷第一七二(大・二七・八六六 a)。
- 10 Raghuvamśa, I, 69; Bhāgavata-purāna, 4, 28, 18; Kathā-saritsāgara, 21, 110; Rājataraṅgiṇī, 3, 473; Muktika-upaniśad, I, 19; etc.
- 11 Abhidharmakośabhāṣya, pp. 129, 178, 185, 189, etc.
- 12 Cf. CHILDERS: Dictionary of the Pali Language, lokantariko s. v.; Peṭavatthu, PTS, pp. 5, 6, 12, 35, 41, 64, etc. (大谷大学大学院)